



和蘭醫事問答
坤



特別
ヤ9
957
2



之情深海憐亦不下此其業致之才陰滋競之
事水中海丁寧成海示其為之年年其空際之海以
所披浮也望其天如之傳以海札之頭難盡
厚之存也早途海禮可上苦之受喜其之條空
之為指發曠自容之後罪其之海空也下度後
於又得海望蜀之顧海煩勞左之昔余海燕唐
為之海海海之下度之希也
享保年中拙老弱年之次為家業出府備習之初
和蘭醫書柱川極海家之海所待之成山由承及以百

何率海守子之區年右書相見仕之紹女之海門人航正
相何之受其為之海子海取之成山由之形望也計之
他之絕之其之志得居其既之數十部海免
之其由之堪欽羨之其左之世上物其書其
之其近之存之其之田舍翁之其一生其居其之海其
海紙上之始之題目計承之其甲條之其志之其償
飲杯仕也

楠林家之取板之金瘡之書發行之由是之其海其
之其始之其仕則其子之方之相求之其也之其也

僻遠之地居之者此等之事も不知一在臨井之味也
配之為之海之水

和蘭文字之解藥名一振ニ其ニ付ラテイニも國語
も其其分大糞も焼味將も一ツ相成の像大畧通
曉仕の初又漢土醫道周の頃迄正安の世の神國を
經る内外醫道大衰微のじ外科ハ絶の回於る宋
元之頃より一家以唱の得る唐人の癖も名を増し病門を
分の療治を視矩不立と云下の條條理甚分明省
悟感服仕在後流中の前す古人の監識を以て日本

一流外科御述立言旨立の御著述御草稿七八卷
出耳之由痛門流を成る卷首の御趣意御文章數
行お見畧梗概を得意仕在流妙齡も之に流壯志毎
事奉驚此書脱稿の日去和蘭流を以て事不
關事も之を於る又亦流の教のし上最後は書可
之廢思も相聞の得る先右書お見仕在事の流の
拙儀も世も之和蘭流不信存壯年之頃も諸家秘
且の傳書知るに之切の信も十四五部見ゆる多分膏
藥油藥汁之政展實に信向も成流に指條集

頃々唐流を建立仕度、其の得たり生得たりを
 守りし其の上を鄙るに成り、及て生解魔
 法師の属する暮の尊諭を、通唐流の内藥を、
 外治の術に拙く、生得の内のみ、唐流随分精と今日
 近も存居るを、先生和蘭内系の書海覽を成、海名審
 思百刑人屍切割を、海覽の得者漢人の國説、大差異を
 和蘭人の所國毫厘の遠を、其所説も甚精密なるに
 付、其の思立を、翻譯解體新書海述作、由逐一
 明細示教、成る趣擊節、服膺仕るべき老老と云々

眼力を、心し、心も悲入、得る他流、其の存和蘭流、
 古今を、雙真、大豪傑不待文王、一、
 の事、
 和蘭人日本、来、始、不知二百年前後、
 恒子、
 了大先生在り、老拙、
 恒子、
 了大先生在り、老拙、

起水々々海産水々々年来回業々々々々々會
及此海の得る龍骨唾々々類計々々々及々々水々々
切齒攪痒々々々々々天良流々々々々幸色伯樂
々々一顧冀北老馬蹏躒長鳴々々時を得る々々珠
千載々々一奇遇々々々存水鳩摩羅什の字僅々
佛經と魏譯一始免一々々釋氏々々道漢土を
不及々日本迄も流行佛道の繁昌今の盛々々々々
々々お考の得る和蘭醫術も漢文通する國を示
々々々西齊亞の肉回文々々國々々々行海恩澤々々々

者々々々億兆不盡々々窮々々仁惠天下の大幸と
奉存水海年々當四十一年又海成は成る由
鄙俗々々諺々々四十々々人の三四月々々々々得る
お海新母安々々存水珠海自志々々海方懐海
靈惠過人春秋の海富々成水上も海大業近年
海成就可々成爲生民々々祝仕水老拙々々解魔
法師々々属と大息仕水々々此海盛奉々々正真和
蘭流外科の一家立本尊有々宗旨の々々先生は即開
闢唱道々々大祀師也宗旨の解魔法師の属と

向來物は彼の醫者より傳へて書きて正宗より
一傳を仕立たる者と存居り其頃に通詞今の吉雄猶林
のころはなかりしゆ也日本醫の文盲は和蘭の上を近き
下より仕立りて宛たる事とて海を渡り

萩野氏著述し利絡編和蘭針法之要術とて戸のま
竈名と書すか形を付其間漢名註し其重譯煩く
其要難見ぬ漢名并々竈名悉く卷末に集め難譯
名義集るる指しぬる針法要術見易く便利なりとの
由又「シカツテカムルブック」を西書とのこと致し譯法を

不存の書は何とやし流俗に題名とて存り且漢土の
古法其國に絶ゆる番夷に傳へ存り趣有る者傳會の
説より奉存候

金瘡跌撲し書とて一巻致所持し和蘭書とて圖と
寫し夫は口授を聞書よりしるものこと也申し然る藥名
假名二つと二つを寄り書すも其見へる申し字音韻お分り
トリスの老拙は字「ラテイン」も國語も其よりけり不知ぬ大
の糞も焼味醬も見分り可申し然るも其見來り存り金瘡
の術を又申し其骨の法を申し尤由藥く方も其より

且和蘭醫書を和解し多し物をも多しと存し
 去圖を極し和蘭醫書より寫し之より何し書の
 國より傳ひや右し書之人身也又之より強七十四あり
 孫絡も幾千萬より數不知し存し又漢名何し物
 日お為下哉海覽より度者指せしより海面倒直し
 此書し海書より度し藥名假名の誤し漢名し遠等
 海真しより度し形し

東洋先生刑屍を割らせしれ蔵志を著されし支佐野氏
 此を誹議しし編辟成論を出し之より衆人皆し其

べきもの凡近來藥選出きし非藥選出也一醫以
 出きし何醫断を出しし得し天下の公論より各私説と
 主張しん為し先世を誹謗し我意闔達し論止時
 醫道の乱と存し況日本も勿論成周より來發後
 醫道海興復可成一家を海立し成し儀衆愚誤
 得鑠金銷骨し海用心を慮外千万此中より隨分運
 海賢慮し物も存し何卒し度海面會齒牙之餘論
 拜聴し度し得し此を定る相成る後残念し存し口惜
 きのもの年より海解體新書し近し海開板し成し由

好兄可仕打角打行太位任取「一」外科書海成就近
去存命難什以海出來功四五枚成存命中好兄仕度
念到仕取尸上度事千萬。之存以得也善与惡等不文老
年之能成况在來造語作字之堪不尸他字之心中上服
宜海察可以下以恐惶謹言

四月九日

福、老拙儀多年世身並和蘭流仕居不學子之盲二
海應以取假名文り又お徳尸古の來其右之照受各
怒可也常以以上

答書

舊年衣關甫軒子之相達以後來海疑難之書お徳仕
一二及御答以所相達以由而去四月九日之書お徳仕
強時寒冷相慕以得也取后海安寧之旨幸恐喜以前
書中多年海務感之儀一奉感之心憚海同志幸
存以取微意不顧思百尸古の事之得也譽誠以行
願仕取自古士君子之期望之千載之後之得也知
己以事之海應以石任我生涯之因如先生體子期

遇此事萬古々大幸と不覺雀躍仕水也去厚事
海賞譽所當と不知り也

前書中尸上假不倭著述外科書法一覽も可なり旨
之御下承得其中瀆老先生之電覽以指字多し
之之存以誠ニ覆將之書殊ニ未定ニ著述ニ至以
以此之御用於可なり後

荻野氏著述刺絡編和蘭針法要術と以り得
醫名記^カを付其旨一漢名を註一重譯煩
思百由漢名付之、醫名之悉く卷末ニ集め難譯名

義集^カ之改^カ可宜旨御尤^カ幸存水併不倭此度
之解體新書も色々工夫仕得多々漢人未説者御
存以取方々書第ニ之扁肝要^カ者計集以篇御存其
篇ニ計醫名を唐音書^カ一々片假名を付以存寄^カ御
存以是之^カ及運^カ叶以唐近也渡水^カ其旨^カ為
之存唐音書ニ仕水日本人^カ讀せ以^カ假名^カ之可存^カ御
其外^カ所^カ之^カ手抄^カ所^カは醫名^カ之^カ書^カ其^カ下^カ之^カ
譯語を德^カ以^カ大抵譯^カ之^カ對譯義譯直譯^カ之^カ通^カ仕^カ
譯^カ之^カ骨^カの事^カを^カ醫語^カ [カ] [カ] [カ] 与^カ以^カ直^カ當^カ以^カ取^カ骨^カ譯

全書又ハ其術具ハ得テ右ノ書ハ古書トク言テ其ノ難
解其上此書和解ノ時代近キ只今程和蘭ノ事用
不_レハ如_レ稿_レ金瘡ノ部ハ少_ク解_レハセ_テ也_ト也_ト也_ト也_ト
彼書_ノ圖_ハ用_ヒセ_イニ_」也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
近見當_リ不_レハ_レ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
上_レ併_不接_テ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
難_ク也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
誤_リ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
通_ル也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト

不_レ事_ニ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
味仕_ル也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
右_ノ書_中セ_イ又_ニ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト

と_レ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
人_ノ所_レ説_ク也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
十二_ノ經_ノ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
誰_レ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
神經_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト
セ_イ又_ニ也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト也_ト

このよき動血二脈の血頭より脳内より作りの靈液より夫の
周身より分布は本源より不_レ上_レなるは必ず相分り不_レなるは先
動脈より相辨_レ為_レ御知_レの動脈は蘭語「スラクア、テル」
に_レ入_レる其の心脈より出_レる偏身に分配は即_レ一身中其
支末返卷_レの循環_レ往_レの血道_レを御存_レの又其支末乃
不_レ右動脈の血頭より原の心は戻_レるは血道_レを御存_レの
を_レと蘭語「ホルレア、テル」と_レに即_レ血脉と確_レ信_レ物_レを_レ
御存_レの此二脈運行往還の糸絡及支末細條終_レる存在
錯綜如織誠_レ絲瓜の糸の如_レを御存_レの其微細のそのよ

至_レの穴目の及_レの所_レを_レの譬_レは微_レく指_レを切_レる血の出_レの所
紙_レを拭_レは如_レ針眼_レの身_レ得_レるは其_レ二脈微細の所_レを御
動脈の心より出_レるより少_レの滞_レなく流利_レは血_レを何_レの所
より出_レる動_レ有_レる其_レ皮_レ表_レに近_レき所_レを_レの上_レを診_レは_レても其_レ動
知_レるは即_レ漢_レ人所_レ説_レ動脈三部の類_レなり御「スラクア、テル」
の「ア、テル」を脈の事「スラク」ハ脈のくつと_レの意_レを御存_レの
唐の字をかり直_レく動脈と譯_レるは又血脉と_レに右_レの
通動脈支_レの微細の所_レより此脈の微小の所_レを_レ受け傳_レへるは返
の_レは表_レに所_レ見_レの浮絡_レよりして浮_レ人青脈_レとも_レの物_レを_レの

利結之法上と本綿を巻く事海を下のより上の血を浮
絡起り此は内治の正法也動脈の裏を往き血脈を
表を還り此は還り行く「ホルア、デル」一名「ブルド、ア、デル」
「デル」は血の事故、血脈と解く此は此血脈をカラツ
フリースと云ふ如箇簧者管中懸り有るは是は脈辨と
解く此は脈辨海を此は血行毎に支られて進ませり徐
後且通行し「ブルド」夫は流動する此血其初は動脈中
より一才を養ひ終り歸に「ブルド」血は海血の術は此脈を施
す和蘭書は血有餘の人を「ブルド、レ、キ」此は其有餘の

血ありて病を生ずるを此脈より其血を除き「ブルド」術の
名を「アドラ、チ、グ」又「ブルド、ラ、テ、ン」此は血を調勻
するの要法を人知し「ブルド」術は此血の其用
餘は血が海に去るも害なく此は一名血脈の名は此
等の如くとも存す又和蘭脈説に有餘の血血脈中
充溢して動脈の血何より傳へ進事なく依る脈絶
卒倒仕は症有ると論此は是等ハ血脈を海に流す
動脈進は極生仕は事なく此方こそ俗に「ブルド」早お
肩の頸紫脈は海に流す理は此動

血二脉乃大幹を腹底より有るは脊骨を並んで連心
 候其大幹より両傍に横両腎を通い脉管より此管
 より兩腎へ血を送り得る其血水中の鹹き水を腎より分利
 一滌澄し小水を出し血の内にも水も交り運行して
 其水所より要用するは其部分機りてとあり
 其血中の水と分利して各部の用をばし此機りてとあり物
 其状覆盆子の如く又ハ蜜柑の皮膜を去り如く妙しく
 して色ハ淡黄なる物なり漢人の未説者より蘭説
 此形状と「スポンヂウスアクチフ」と有るは「スポンヂウス」ハ海産

本草家より玲瓏瑣々充るもの也和名水吸或海綿とあり
 此の貴邦方言何と申哉少許ハ西覽「アクチフ」
 語ハ意一物と云ふは得る此所より「採」の字ハ「採り」即海
 綿採り事ハ海綿の状此機りて似此物固身
 所在有るは水血分利をばし「辟言」ハ皮下小有るハ汗を分
 利し食道より飲食を傳送するの液を製し胃より
 此の是を調和し杯は水類より所より其用をばし申
 血中ハ水あるは試み血を紙より取ると其血を
 凝り多しなり「スポンヂウス」ハ腎花ハ一種の機りて此の採り

およて血中の水を多量に引出し其態恰も各瀉石の如き
 之のやうに日の飲食化して血水と成り周身を巡りし得た
 毎日増の汁を相減する腎臓の傷を無用の水を瀉
 一の事譬言ハ土器に水を入るを一杯も水の得る滲透して墨
 ハ瓶に残り多量で下を去るに同し理を右の如瀉
 一のけ膀胱傳へ小便を漏しその残る所の血は解る
 又新又成る所の血と成り一身に循環し動血二脈
 の血中より有る鹹味水蘭語「左イ」の肌表より「第次
 皮」所より「一」の機を思はるる分利を「膜理」汗とす

出「中」即ち水成り「中」も「中」も「中」も「中」も「中」も
 汗多き時を小便少く「中」の是ハ血中の鹹水皮表より
 外に洩すは「中」の此れ又痰唾成り水と遠汗を鹹く
 して且臭く「中」のお蒙り身ハ「セイヌ」を「前」の「セイユウ」の
 なる遠くを右動血二脈乃ち支那直頭と連り上り「中」の血道
 の大支を「テ」左イ「セイ」テ「リング」ブ「セムス」と「中」の「テ」左イ「セイ」テ
 「リング」と「中」の右側を「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の
 灣又入「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の
 仕あり左右後と「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の「中」の

又循ひ上り左右せ、頂の直縫より一髪となり鼻を
ふくむ、此を又「シツケル左イセブーセム」といひ「シツケル左
イセ」とは強状といふ事、前項又循ひ曲り、此状強似
ぬ、名々の事と云へ、此は夫の強者といひ、此は
右の髪一ツ、取ると三方行合の所より、
右を「コールデブーセム」といひ「コール」とは四ツと云ふ事、
左右髪を二と云ふ事、此の中を、
四ツの「コール」といふ名、
も甚短、此は髪を、

四髪の中各脈辨、血徐行の、
髪中の血、動血ニ脈の頭、
「フランカール」といふ人の説、
此血其強、髪を、
「ペイン」といふ痛事、「アツベル」といふ果の事、
是の松子楓毬の、
と事、
精血より右の「セイユウホクト」といふ靈液を、
唐云、髓液を、
髓海と、

九宮又分以内之泥九宮此物と云ふは即其分那と云
 了りし脳髓と一身主宰の根元是より分り大經連鼻者二
 連眼者六つ連頭面諸部者二連面者二連耳者二つ
 連臟腑者二つ連舌者二つ連皮表者二つ下つて入脊骨連
 兩足腹背者六十總數合八十二と云はるは為海見之集し和解
 書には七拾四と云はるは得る不偏難律仕形「夕ブラアチトミカ
 とり書は八十二と云はるは和蘭人も古ハ開ケ不中事と云はるは哉
 少々の異同ハ海見此八十の經甲つて左右と云はるは大經と云
 其支分細條一身を分分布一動血二脈微細の者と錯綜

仕る解體新書第三篇格知篇第二章曰世奴此翻神經其色
 白而強其原自腦與脊出也蓋主視聽言動且知痛痒寒
 熱使諸不能動者能自在者以有此經故也見于第八篇
 又同篇第二十章曰世奴此翻神經和孤都此翻神經成於腦内也蓋四
 支百骸神經所行皆得之而能全故名云地爾禮其牙
 私天此語翻曰生氣見于第八篇此神經汁也右より痛果機
 了りし精血を瀦し此汁を生りし是即腦髓液と其液神
 經又傳送し八十の大經又傳へ右の如く一身の働と云はるは
 形のしるは物と云はるは得る其妙用海見此事唐と云はるは神

氣やいふや物か神経と義譯仕水此神経眼ニ入リ并四
 番の膜とあり主視物入耳主聴聲音入舌知五味は依
 る有疾則失食味は口中ニ在り舌及食道の下臆中の部分
 多病を治し此病ニ誤り熱キ物を食ひハ先舌より熱く咽
 中を不炙胸より臆中の部分より熱を却りハ在一身
 肌膚ハ第二番皮より多く臆中より直ニ皮表より寒
 熱痛痒を知りハ又骨を纏ひハ膜より多一故カ切切骨
 上の皮と骨の隙痛強は臆中より振る物より臆中か神経と譯
 しハ多も不苦多とも存り季細く事ハ第八神経篇より

洋より此篇には経のめぐりと振の細くは臆中に入る開板之
 上は視るを来ハ其微細の物は又目の及所よりハ其の振
 の微細の物何と云へ智哉と臆不審可有は臆中ハ「ア」
 ートガラスと云ふ器より見ハ得ハ能ハリハ此蓋ハ虫眼鏡
 とも云ふと云ふは熱中よりハ其の振ハハ千里鏡の
 如く之は程よりハ其の微細の物と云ハ眼鏡
 數六通海は其第六番目の眼鏡よりハ物と二百倍より
 為るハ由夫ハ益振よりハ其の得ハ大サ守余よりハ
 又得其脚の強弱と能ハリハ其の益よりハ其の免

人身の經絡を其纖細の所も皆能く分りしめお腦を
 神經の所なき事有生者禽獸も同一事なるを試み
 嵐もその海割海覽可成り皆頭より面部七穴數は連
 居りし心も亦神氣の海説有るは得て蘭説を心せ
 ずし配血の元も腦は神氣之源と存し既に海人の説
 も天谷元神守之自真言人身中上有天谷泥丸藏
 神之府也又頭有九宮中曰泥丸九宮羅列七竅應透
 泥丸之宮魂魄之穴也又真頭痛者其痛上穿風府陷
 入泥丸宮不可以藥愈朝發夕死夕發朝死蓋頭中人

之根根氣先絶也又腦為髓之海髓海有餘則輕勁多
 力不足則腦轉耳鳴脛痠眩冒目無所見又腦者髓之
 海諸髓皆屬於腦故上自腦下至尾骶皆精髓升降之
 道路也やとや等と數語の前は辨し神經の説と後符合
 ぬれは存し又蘭人中風の説此病神經に因すと海
 府其運動管為心管なりし神經の病は癱瘓
 不仁仕水動血屬の病はすらし脈も愈一切は血も
 常は血は榮養一身の職も其病はすらし脈も
 不致脈も愈しやの右の通は働きといはしは神經

病如痛痒寒熱を免ずは是れホラ神經の傷也
察るに成水彼邦強壯の説也所大畧如此事
漢人の説も此神經等の論説もよりす
裏支而横者為絡絡之別者為孫註證發微曰其支
而横者即如肺經有列缺横行手陽明大腸者為絡
也孫註云得は臂言是之陽經は是く三陰は傳は是之
陰經は皆是の端より起りし事くは有るは若病
之の踝骨より下脱落し又刀を両足を切落れ
たる人有んは之陰の終と之陽の源を断き何と

一身の立裁孫強壯支の名も有るは得は皆何事も
分るは和蘭人の説も動血三脈の大小の支も如絲瓜系
相交り一身細を知る如くは如何所を以ては
所も傳はは所は是れ夫は一身の血脈循りしは誤る
支を傷は得は前もは通動脈はは辨しは血を
之流し行く血を止るは俞穴の傷は血不止と傳は
動脈の大支の所を傷はは且反流の脈も
支の通筋遠いとおえ得はは不佞同藩宮崎甚平と
生来三部尺澤等脈應しは草木の枝根を

盤根とくうの脈は言持根と夫成故と拈はと同一事を
動脈の支は細くは得る脊骨と並其大幹をきり成故
不死事とを名は彼所説に就く自己考付事近取
文お徳し其水錯難く所宜海説をられば存水
海不審も海脈の事可知なり

此度翻譯仕所解體新書之儀是正和蘭書和解
少く見當りし得る急度翻譯と事只今近見當り
名及自我作古く業より万事譯法も新製
仕所勿偏浮屠氏譯法も可有と海脈を是と一尚學

是と海脈の對譯義譯直譯と之等仕所彼法
とては又海字何より事譬に唐より三部人迎
と動脈とを海脈則右の血脈往者として「スラクアーテ
」ともの動脈と海脈と和蘭より血脈還者を
唐より青脈と海脈の動脈の脈の字對し前條
のいふは血脈と譯しは又經脈と熟水時
相聞へは得る十二經脈をいつくは何經とりて何脈
いふ事「セイニウ」ハ元より一身の最とす者此動脈
とお分りしは「セイニウ」ハ經の字を下しは又唐より俞穴

と得るは大筋の前後より杯と云ふは大筋の蘭人所说
「イスヤリトトス」ト云者之端也此「スビール」云物
所謂筋より去るはも澤説といはるは頭腹尾の差
別有るは東洋先生蔵志は筋其末肉と成はるは筋
は成は得る其筋腹之筋の肉の乃は文に在る水は積る
麻の如く其状筋膜を可申者之筋は元来一物筋を
詳し大抵新書之譯是等之趣ははるは同志之事
海存の一通し上水は只も海存の示教
可下候

近來非蔵志非藥選任醫断杯追々出る私説を主張
世人を先導を非傍一醫道之礼と相成はるは只は
海存の存も存も相浅格も世態少見之戯言然る
之可恥事は海存の若狭之世風解體新書開板の上
衆愚諤々鏢金銷骨之用心可仕る海深切有惑位
仕水也も按劔の人を多可有る海存の去一番徳を
捨玉よりは覺悟するは得る相成る愛の併一人なり
稔付はる本望する至る海存の陳勝之事不成水得るも
高祖も秦の苛政をお改りしは勝る志も立り水象

醫也如右一度着實之編を唱ひて予も千載之徳リも
改りし時節可有之存いし存いし予も上度事如林の
得る字紙難盡先函答旁如此函存い恐惶謹言

十月十五日

和蘭醫事問答卷之下 終

和蘭醫事問答跋



此書也先大人建部先生一時消暑之暇所以
據平素之蓄念也未始意於述作關甫軒觀省
之日書授以居無幾甫軒再遊于東都質諸杉
田先生安永癸巳歲得杉田先生之答書先大
人之意始豁如焉是不肖^勤髻亂之時所面視
也竟使家兄游于東都受業於杉田先生之門
留學數年北歸是時杉田先生未舉男子致書
先大人請養不肖^勤以為子建部先生以書辭

曰豚兒不肖不敢當負荷之任設廢箕裘之業墜名家聲聞則何以塞不子之責於天敢辭杉田先生又以書請日記云蛾子時術之若果蛾子則余之幸也否則余之不幸也幸不幸天也非今日之所逆觀書往復者數矣切請不已竟養不肖勤以為適嗣天明壬寅不肖勤年甫弱冠冒杉田氏爾來侍於先生膝下十餘年矣嫗覆之恩昊天罔極時術之義責太重矣然稟賦孱弱加以多疾日夜怵惕惟懼不克負荷其薪

近時先生之業隆行于世從游之徒負笈日至先生輒示以此書令其先知吾業之所由而入也勤頃恐屢經謄寫之外訛也與大子煥謀上棗梨以貯于家塾冀省門人謄寫之勞如其論說則待世之識者矣
寬政甲寅三月
不肖男勤敬識



鴻臺知彭卿書



陸奧一關侍醫清庵建部先生

若狹小濱侍醫鷓齋杉田先生

問答

男

若狹小濱醫官

杉田勤士業校正

陸奧一關醫官

衣關敬麟伯龍

門人

伊豫松山醫官

安東其馨子蘭輯錄

陸奧仙臺醫官

大槻茂質子煥

紫石齋藏刻目錄

重訂解體新書

西醫ルムス 人身腑命書 鷓齋杉田先生譯定

近刻

瘍醫新書

病門二百五十之内 西醫ラウレンスヘイスル之外科書 金瘡之部 廿三條同前

近刻

同

瘡瘍之部 廿九條同前

近刻

同

骨傷之部 紫石齋追譯 十二條

近刻

同

脫臼之部 同前 十二條

近刻

同

刺絡之部 玄澤大槻氏追譯 十三條

近刻

同

繃縛之部 紫石齋追譯 十三條

近刻

狂醫之言

和漢古今醫說ヲ
看破シ西醫說ニ
ヨリテ醫道ヲ辨正ス 鷗齋先生著

近刻

醫學一洗

西醫ノ說ニヨリテ
和漢ノ醫說ヲ評ス 紫石齋著

徽瘡方彙

和漢古今諸醫
及ヒ西醫諸方法ヲ集ム 紫石齋著

近刻

癘風秘錄

和漢諸名家
及ヒ西洋諸法方ヲ録ス 紫石齋著

近刻

西洋醫談

紫石齋著

備荒錄草木圖

清庵建部先生著

近刻

内科精蘊

西醫ラウレンス
ヘイステル内科書 紫石齋譯

和蘭醫事問答

後編 續編

嗣出

建部清菴先生

問答書

杉田玄白先生

紫石齋藏版

寬政七年乙卯初秋

東都書林

弘所

須原屋善五郎

